イスラーム世界研究　第9巻（2016年3月）315–339頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 9 (March 2016), pp.315–339

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』（9）

守川　知子*　監訳
ペルシア語百科全書研究会**　訳注

（p.484）

第8部　ジンや魔物（marada）の驚異について

［第1章　ジンやディーヴについて］

至高なるアッラーのいわく、「言ってやるがいい。『わたしにこう啓示された。一団のジン[1]が、（クルアーンを）聞いて言った。「わたしたちは、本当に驚くべき読誦（qur'ān）を聞いた。」と』」［Q72: 1］。［すなわちペルシア語では、神はこのように］告げておられる。「おお、預言者よ。自らのウンマに次のように言え。私にこう啓示が下された。ジンたちが『クルアーン』を聞いて言った。『私たちは、正しい道を示してくれる驚くべき読誦（qur'ān）を聞いた。私たちはこれに帰依しよう』と。」

『クルアーン』にはこの章句に類似したものは多い。しかし、ディーヴ（悪鬼）（dīw）[2]やジンが存在することを信じず、否定する者たちもいる。彼らは癲癇が病気の一種だと考えており、「ジンがどうやって人間に取り憑くというのか」と言う。だが［ジンが人間に取り憑かないとすれば］、なぜアリー・ブン・アビー・ターリブやハムザ・ブン・アブドゥルムッタリブ[3]は倒されてしまったのか[4]。彼らはこういったことを否定し、自分たちに見えないものは一切存在しないと思っている。

『クルアーン』では［神］ご自身が「本当に或る種の人間は、ジンの或る者に庇護を求める」［Q72: 6］とおっしゃっている。言われているところでは、荒野にディーヴを恐れる部族がいた。［その中の］1人が「この谷の長に、彼の民による愚行からの庇護を私は求める」と言った。すなわち［ペルシア語では］、「私は、他のディーヴたちの悪行から私を守ってくれるよう、ジンたちの長の庇護下に入った」と言った。そして、彼は安心して眠った。

また、［神が］男のジンについて語っていることから、女のジンも存在する。「かれらの財産や子

---

*　北海道大学大学院文学研究科准教授

**　京都大学の西南アジア史学研究室の関係者を中心に活動する本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号（2009年、198–204頁）の監訳者による「解題」等を参照。

1）ジンはイスラーム期以前のアラビア半島では沙漠の精霊として知られ、イスラーム勃興以降には「煙のない炎から創造され、知性を持ち、人間でもなく、天使でもない」超自然的な存在を指すようになった。また、ムスリムになった良いジンと、不信心者のままで人に危害を加える悪いジンがいるとされ、後者はシャイターンやイフリートなど様々な名前で呼ばれる［「ジン」『岩波イスラーム辞典』; *EI*²: Djinn］。本書でも、ジンと同じような精霊や超自然的存在を指す名称が数多く登場するが、それぞれの違いはきわめて曖昧である。本訳注では便宜上、「ディーヴ」（次注参照）、「イフリート」、「シャイターン」、「グール」、「スィゥラート」、「ナスナース」など原語を優先的に表記して区別する。

2）ペルシア語の「ディーヴ」はイラン古来の神話に登場する「悪しき心を持つ超自然的存在・精霊」を指し、イスラーム期以降はアラビア語の「ジン」とほぼ同義で使用される。ただし、アラビア語のジンは、ペルシア語のディーヴ（悪鬼）とパリー（妖精・妖魔）に使い分けられることもある。イランの神話伝説上のディーヴは、黒い体に長い歯、巨人、多頭など、異形のすがたで描かれ、人を喰らうこともある［*EIr*: Dīv; *EI*²: Dīw］。本訳注では基本的に「ディーヴ」と原語のまま表記し、固有名詞が付く場合や複合名詞を構成する場合のみ「悪鬼」と訳す。

3）預言者ムハンマドの叔父［本訳注（4）『イスラーム世界研究』第4巻1–2号、2011年、518頁、注190］。624年のバドルの戦いでクライシュ族の有力者を殺害したため、その娘でムアーウィヤの母となるヒンドの怒りを買った。ハムザが625年のウフドの戦いでメッカ側のアビシニア（ハバシュ）人奴隷ワフシーによって殺された後、ヒンドは報復としてハムザの腹を割いて肝臓を食べたとされる［「ハムザ」『岩波イスラーム辞典』; *EI*²: Ḥamza］。

4）アリーは、彼を敵視したハワーリジュ派のイブン・ムルジャムに殺害され、ハムザは前掲注のとおり、戦死した後、切り刻まれて肝臓を食べられた。特に後者の例に見られるような、イスラームに功績のあった人々に対する残虐な行為は、ジンに取り憑かれた人々によるものであったと考えられたのであろう。

供つくりに協力しなさい」[Q17: 64] **という至高なるお方のお言葉にあるように**。[すなわちペルシア語では、神は] イブリースに、「人間の財産や子供つくりに協力しなさい」とおっしゃった。つまりは人間が1人生まれるところ、ジンたち [の協力] によって千人 [の人間] が生まれるのである。**またそのお方のお言葉である「ジンの大物** [イフリート][5] **が言った**」[Q27: 39] **は**、次のことを意味する。スライマーンはヤツガシラ（hudhud）から、サバーの地には女王がいて、彼女には立派な玉座があることを聞いた。スライマーンはディーヴたちに（p. 485）「その玉座を持って来い」と命じた。イフリート（'Ifrīt）は「私が瞬き一つの間に、それを持って参りましょう」と言った。[スライマーンが瞬いて] 見たときには、アーサフの助けで玉座が用意されていた[6]。

ジンに関するこれら [の話] は、いずれも、『クルアーン』が述べ伝えているところである。もしジンが存在しなかったならば、創造主はこのような逸話を語りはしなかったであろう。しかし人間は狭い理性の中でしかものを見ず、把握できないものや見えないものは存在しないと思ってしまう。だが、[そのような考えは]『クルアーン』を否定することになるのである。

＜逸話＞

神学者のナッザーム（Naẓẓām-i mutakallim）[7] はアブー・アル＝フザイル（Abū al-Huḏayl）[8] とジンをめぐって論争をした。ナッザームは「ジンは存在する」と言い、アブー・アル＝フザイルは「ジンは存在しない」と言った。両者の対立は長きにわたった。時のカリフは彼らの仲を執りなすため、「ディーヴたち [の存在] を証明することはできないが、『クルアーン』が述べている以上、信じなければならない」と言った。

アブー・アル＝フザイルは井戸を所有しており、そこから水を引いていた。ナッザームはこの井戸の中に隠れた。アブー・アル＝フザイルが桶を下ろすと、ナッザームがこれを手で掴んだ。アブー・アル＝フザイルが [桶を] 引っぱると、ナッザームは恐ろしい声を出して、「ディーヴや妖精についてなぜ中傷するのか」と言った。アブー・アル＝フザイルは井戸に石を置いて [ふたをし]、カリフに「ナッザームが井戸の中に隠れ、ディーヴのふりをして私を嚇しています」と伝えた。カリフは人を遣わし、ナッザームを外に出し、平手打ちを食らわせ、彼をカリフの御前に連れて来させた。カリフは次のように言った。「人は不可視なものを見えるようにすることを欲し、その存在を証明しようとするが、不可能である。墓での責め苦やムンカルとナキール[9] と同じように、これらすべてを信じなければならない。[不可視なものの存在は] 耳で聞いて理解すべきものであり、理性によって理解すべきものではない。その存在を証明しようと奔走する者は、汝が蒙ったような恥辱を受けることになる。」

5）もともと、『クルアーン』のこの箇所で述べられる「イフリート」とは、単に「反抗的な」というほどの意味であったとされる。やがて、神学者らがこの語を「地下世界に住む、恐ろしい力を持つ精霊・魔物」を指す用語とした。なお、イフリートと、ジンやマラダ（魔物）、シャイターンとの関係については、学者ごとに見解が異なる [*EI*²: 'Ifrīt]。

6）なお、『クルアーン』では、この言葉を述べて玉座を持って来たのはイフリートではなく、「啓典の知識を持つ者」とされている [Q27: 40]。

7）9世紀前半に活躍したムゥタズィラ派神学者 Abū Isḥāq Ibrāhīm b. Sayyār b. Hāni' のこと。若い頃はバスラで母方の叔父であるアブー・アル＝フザイル（次注参照）から学び、やがてバグダードでマームーンに仕えた。その後、師アブー・アル＝フザイルが説いたものより緻密な、独自の神学論を確立した [*EI*²: al-Naẓẓām]。

8）バスラ出身のムゥタズィラ派神学者（Abū al-Huḏayl al-'Allāf Muḥammad b. Huḏayl）で、9世紀前半にバグダードで活躍した [*EI*²: Abu'l-Huḏhayl al-'Allāf]。

9）墓で死者に信仰の有無を訊問する2人の天使。死者が正しい信仰を持ち、「ムハンマドは神の使徒である」と答えると、天使は何もせずに立ち去る。死者が不信仰者である場合には、天使は神が満足するまで、あるいは審判の日まで、その者を激しく打ち続けるとされる。また、この2人の天使による懲罰は「墓での責め苦」と呼ばれる [*EI*²: 'Aḏhāb al-ḳabr, Munkar wa-Nakīr]。

この逸話が意味するところは、創造主がジンは存在すると言った以上、[それを] 信じなければならない、ということである。

＜逸話＞

次のように言われている。アドゥド・アル＝ダウラは賢明な男であり、勝利者たる王であった。また、様々な呪文や、魔術の知識を持っていた。

彼は女奴隷を1人買い取った。彼の心は彼女のとりこであった。材木で館を建て、夜はこの館の中でその女奴隷と過ごしたものであった。戸を閉めて、外には衛兵を控えさせていた。(p. 486) ある夜、彼が目を覚ますと、女奴隷の姿が見えなかった。戸は閉じられたままであった。彼は、何が起こるのだろうかとじっと待った。明け方、女奴隷を見つけるや、彼は言った。「どこにいたのか？」

彼女は言った。「みすぼらしい男が現れて、私を連れ去ったのです。」

[アドゥド・アル＝ダウラは] 言った。「もし [その男が] また来たら、私に知らせよ。」

次の夜、[男が] 現れて彼女をさらった。女奴隷がアドゥドに知らせると、彼は男を捕らえた。[アドゥドが]「おまえは何者か？」と言うと、[その男は]「私は魔術の知識を持つ者だ」と答えた。

[アドゥドは] 言った。「私にも教えよ。そうすればおまえにこの女奴隷をくれてやろう。」

男は [魔術を] 教え、[アドゥドは] 男にその女奴隷を与えた。

言われているところでは、アドゥド・アル＝ダウラは [魔物から身を守るために] 死ぬまで魔法陣 (mandal) の中に座っていた。[ところが] 彼の足が魔法陣からはみ出しており、ディーヴが足を攻撃したため、彼は死んでしまった。

この逸話が意味するところは次のとおりである。ディーヴ [の存在] を否定することはできない。「**スライマーンの命令でかれの軍勢が集められたが、かれらジンと、人間からなる**」[Q27: 17] **というそのお方のお言葉にあるように**。[すなわちペルシア語では、神は]「われはスライマーンのために、ディーヴと妖精からなる兵を集めた。彼らはスライマーンの御前に集まり、彼の支配下に入った」と言った。[従ったジンの] あるものは建物を建て、あるものは水に潜って宝石をもたらした。

一方、[スライマーンに] 背いたうちのあるものは、「ジンのサフル (Ṣaḫr-i jinnī)」[10] であった。[サフルは] 人間のような出で立ちをしていたが、ライオンの顔を持ち、四肢は動物に似ていた。[スライマーンは] サフルを2つの岩山の間に閉じ込めた。

別の種類のジンも連れて来られた。そのジンたちは口から火を吐き出し、犬の鳴き声を上げていた。[また] 半身は犬のようで、象のような長い鼻を持ち、半身は人間のようなディーヴも連れて来られた。[スライマーンが]「名は何という」と聞くと、次のように答えた。「ミフリーン・ブン・ハッファーフ (Mihrīn b. Haffāf) だ。私はヌーフの船にいた。私の役目は歌を歌い、酒売りたちの友となることだ。」

[スライマーンは] そのジンも閉じ込めた。

その後、夜のように真っ黒な別のディーヴが連れて来られた。[スライマーンが]「名は何という」と聞くと、「ハイハール (HYHAL) だ」と答えた。[そのディーヴは] 剣や武器を持ち、髪の毛1本1本から血が滴り落ち、真っ赤な首輪をつけていた。[ハイハールは]「これはハービール (アベル) の血だ。血が流されたときには必ずやその血が我が眼前でも流れるのだ」と言った。

10) 海の魔物であるサフルについては、本書第7部に既出 [本訳注 (8)『イスラーム世界研究』第8巻、2015年、291頁]。

そこでスライマーンはそのディーヴも閉じ込めるよう命じた。その後、それぞれに特徴のあるディーヴたちが連れて来られた。（p. 487）［クルアーン］注釈者たちは、「**スライマーンの命令で軍勢が集められた**」［Q27: 17］という章句の注釈として、以上のようなことを述べている。

ところで、人間はジンを見ることはできない。**イマーム・アル＝シャーフィイー――アッラーが彼に満足されますように――は、「ジンを見ることができると言う者の証言は無効とされる」と述べている。「かれ（悪魔）とかれの一味は、あなたがたの見えない所からあなたがたを見ている」**［Q7: 27］**という至高なるお方のお言葉にあるように、**［アル＝シャーフィイーの］見解は正しい。しかし、創造主が［ジンを］お示しになる場合には、［人がジンを見ることも］あり得る。とはいえ、「私はディーヴを見ることができる」と主張する者がいても、誰も聞き入れはしない。

ディーヴは思うがままに自分の姿を変えることができる。

＜伝承＞

マームーンの御前で次のような話が語られた[11]。ヒンドゥスターンの山中に1人の老人がおり、400年以上も昔やさらに昔のことについて話し、預言者――**彼にアッラーの祝福と平安あれ**――の教友たちや、イーサー――**彼に平安あれ**――やシャムウーン（シモン）について語り伝えているという。マームーンは［その老人の］話を聞いてくるよう人を送った。使いの者が老人のもとに行くと、老人は［実に］恐ろしげな容貌をしていた。老人は自身が長命であることを伝えた。［使いの者が］聞いた。「誰を覚えていますか？」

［老人は］言った。「わしはアリーを覚えている。イブン・ムルジャムが彼に傷を負わせた。アブー・ルールーとウマル――**アッラーが彼に満足されますように**――や、ウスマーンの騒動も覚えている。イーサー――**彼に平安あれ**――を覚えている。奴は死者を生き返らせた。ヌーフ――**彼に平安あれ**――の大洪水も覚えている。」

［使いの者は］「それは驚くべきことだ」と言った。

［老人は］「わしが人間だったとしたら、このようなことは不可能だったろう」と言った。

［使いの者は］尋ねた。「あなたは誰なのですか？」

老人は言った。「わしはアザーズィール（‘Azāzīl）[12] だ。この土地でヒンド人の行者たちに出会った。わしはこの地に居を定め、みなを惑わせ、彼らの賢明さとやらを嘲ってやった。彼らは牛を崇拝し、火の上に身を置いて、［自らを］燃やしている。［というのも］わしが彼らにこういったことを教えてやったのだ。自らを［火に投じて］燃やせば、40日後に魂が戻ってくる、とな。帰って、［以上のことを］マームーンに伝えるがよい。」

このような様々な逸話が伝えられている。独断や根拠の弱い推測に基づいて、すべてを偽りだとみなしてはならない。また自分だけが真実を語る者だと考えてはならない。

＜逸話＞

たとえ話の中では次のように言われている。口やかましく、性悪な妻をもつ男がいた。男は妻を荒野に連れて行き、妻を井戸に投げ込み、石をその上に置いた。40日後、妻がどうなったかを確

11）ここで挙がる逸話については、本書第1部で同様のものが述べられている［本訳注（2）『イスラーム世界研究』第3巻1号、2009年、421–422頁］。

12）イスラームにおける堕天使の名。モデルとなったのは、聖書に出てくる砂漠の悪魔アザーゼルとされる。一部のハディースでは、堕天使になる前のイブリースの名前とも言われる［*EI*²: ‘Azāzīl］。

認するために男は戻ってきた。(p. 488) 男が井戸のふたを持ち上げた途端、ジンが半狂乱になって泣き叫びながら井戸から飛び出した。ジンは男に言った。「おお、非道な者よ。よくもこれほど口やかましい女を私の住まいに連れ込んでくれたな。おかげで私の快適な暮らしは散々なものになったではないか。」

［この話は］女はディーヴよりも悪しきものだということを示している。

＜逸話＞

言われているところによると、ある帝王が自分の庭園に行った際、ディーヴが雌のロバと交わっているのを目にした。王はディーヴを捕らえた。ディーヴは言った。「私を放してくれ。そうすれば、おまえに動物の言葉が理解できる方法を教えてやるぞ。」

［ディーヴは］王の口に水を含ませると、「私から教わり、目にしたことを誰にも話してはならない。［話せば］おまえは死ぬ」と言いながら去っていった。王は館に帰ると、ディーヴが雌ロバと何をしていたかを思い出して笑った。王妃は執拗に「なぜ笑っていらっしゃるの？」と尋ねたが、［王は］答えることができなかった。王妃は問い続けて王を悩ませた。王は「明日答えよう」と言って、外に出た。

彼の飼っていた牛が飼い葉を食べていなかった。雄鶏が言った。「なぜ食べないのだ？」

［牛は］言った。「明日、私のご主人が死んでしまうんだ。」

［雄鶏が］言った。「飼い葉を食え。悲しむことなどない[13]。私は餌をついばむから。」

牛は言った。「おお、雄鶏よ。相変わらず知性のない奴だ。いずれ死ぬのだからと、主のために悲しまないとは。」

雄鶏は言った。「あいつは生きているよりも死んだ方がよい。私には10羽の雌鶏がいるが、私はその10羽すべてをしっかりと抑えている。雌鶏たちが私の命令に背くことはない。だが、私の主人には1人の妻を抑えつけるほどの気概もなく、だからあの女はあいつに従わないのだ。言ってはならないことを言わなければ、死ぬこともないのに。」

牛は言った。「では彼はどうすればよいのだ？」

［雄鶏は］言った。「棒を手にとって、妻を打擲すればよい。そもそもあの女は例の話を知ってどうすると言うのだ。」

王は［この会話をすっかり］聞いてしまった。そこで妻を懲らしめたところ、妻は静かになった。

この逸話の意味するところは次のとおりである。ディーヴについては多くの話が述べられている。たとえ話もあれば、真実のものもある。

＜逸話＞

次のように言われている。サルの姿をしたディーヴがスライマーンの御前に連れて来られた。長い爪を持ち、ギーギーと声を上げていた。(p. 489) その泣き声を聞いた者はみな涙に暮れた。［スライマーンが］「おまえは誰か？」と聞くと、［そのディーヴは］こう答えた。「私はムッラ・ブン・アル＝ハーリス (Murra b. al-Ḥāriṯ) だ。私の特技は横笛 (mizmār) とシンバル (ṣanj) を演奏することである。リュート (barbaṭ) が演奏されるところ、常に私がそこにいる。」

13) ペルシア語で「悲しむ」は、ġamm ḫurdan (悲しみを食べる) と表現する。この箇所は、「悲しみを食べるのではなく、腹の足しになる餌を食べよ」というニュアンスであろう。

＜逸話＞

ガンド[14]の人々の境域には、金と銀を産出する山がある。その山にはいくつもの洞穴や岩窟がある。そこでは非常に恐ろしい姿をしたディーヴたちが目撃されている。その説明をすれば長くなろう。

ある賢人は次のように言う。「私は、ディーヴの目撃談についてはまったく認めていなかったが、そのようなものを見てみたいと思った。ある日、私は鉱夫のもとへ行った。ディーヴの何かしらを目にすることができるかもしれないと思い、彼のもとに留まった。ある日、ひどい悪臭が漂ってきた。鉱夫は言った。『ジンが来たぞ。ぴくりとも動いてはならない。もし動けば、俺かおまえを攻撃してくるだろう』と。やがて、象の顔をした生き物が現れ出た。そいつは前に進み出て、『わしと仲良くしようではないか』と言った。私は心の底から震えあがり、言葉を発することができなくなり、そいつから逃げ出した。鉱山の頂上までやって来ると、そいつが口から火を吐き出しているのが見えた。しばらくして、頭髪が焼けてしまった鉱夫がやって来た。私に掴みかかり、『俺を殺すつもりだったのか』と言った。その後、私は悔い改めて、ジンに関することを否認しないと誓った。」

＜逸話＞

［先の逸話に続けて］次のように言われる。とある神学者に私がこの話をしたところ、彼は私を嘲笑って、「それは空想か妄想だ」と言い張った。私は彼に、「その鉱山へ行ってみろ。そうすれば、どういった状況かわかる」と言った。彼は出かけて行き、槍を手にしてその穴へと入った。彼は、「私が目にするディーヴは何であれこの槍で殺してやる」と言っていた。朝になると、顔が［焼け焦げて］真っ黒になった男が1人、うめいていた。［男はくだんの神学者で］その槍が顔に刺さり、反対側に突き出ていた。人々は、「あなたに何があったのだ」と尋ねた。（p. 490）彼は［焼けて］黒くなった舌を出した。つまり、「話すことができない」と伝えようとしたのだった。彼は、その日のうちに死んだ。

こういった形式で様々な逸話が語られている。哲学の徒（ahl-i falsafa）はそれらを嘲笑い、受け入れようとはせず、「ディーヴは幽質（laṭīf）である。［それに対して］人間は稠密（kaṯīf）であり、ディーヴを見ることはできない」と言う。だがディーヴを見ることができない以上、それは天使の目撃をも否定するようなものである。天使はディーヴよりも幽質である。このこと（天使が見えること）の否定は、不信仰（kufr）の始まりである。

＜逸話＞

次のように言われる。ある男がいた。イブリースは彼の前に繰り返し現れていた。男は［イブリースに］本来の姿になり、その姿を見せて欲しいと頼んだ。［イブリースは］彼を海岸まで連れて行った。1つの玉座が見えた。黄金の玉座は海の中に置かれていた。イブリースがそこに座ると、ディーヴたちが彼の周囲に現れた。あるディーヴが現れると、イブリースは言った。「おまえは何をやった？」

「私は、2人の人物をいがみ合わせました」と言った。

別のディーヴが現れて、言った。「私は、ある人間を屋根から落としました。」

さらに別のディーヴは言った。「私は、ある人物に命じて、［別の］ある人物を殺させました。」

14）本訳注（8）、321頁参照。

また別のあるものは、「私は、夫婦を仲違いさせ、離縁させました」と言った。

イブリースは、この［最後の］話に嬉々とした。彼は［歓喜の］叫びをあげ、空を飛んで、世界を一周し、玉座の上に戻って来た。［男は］イブリースに尋ねた。「なぜ、それほどまでに喜ぶのか？」

［イブリースは］言った。「なぜならば、離縁には災いが詰まっているからだ。［離縁すれば］男も女も独り身となり、姦通しようとする。姦通からは不義（ハラーム）の子が生まれる。不義の子からは、様々な災いが生じる。家々を破壊し、人々を傷つけ、殺人を犯す。わが全軍をもってしても不可能なほどの損害がその子からは生じるのだ。不義の子らほどに、私にとって愉快なことはない。」

＜逸話＞

次のように言われる。太古の昔に、1人の王がいた。彼は大きな宝石を持っていた。王は宰相に「この宝石と等価の品を探し出せ。さもなくば、おまえを宰相職から解任する」と言った。宰相は1年の猶予を求めた。（p. 491）彼は世界の隅々を巡って、ルビーや真珠を潜水夫たちから探し求め続けた。だが、見つけられなかった。

周海[15]の海岸をさまよい続けていると、ある晩、驚くべき姿の海の魔物（baḥrī）が現れて言った。「何用でこの岸辺をさまよっているのか？」

彼は言った。「この海の水を枯らすために私は来たのだ。この栄えた岸辺を荒廃させてやる。」

海の魔物は言った。「おまえは、我々を故郷から追い出して放浪させるのを良しとするのか？ 我らの魂はこの海からできている。帰れ。」

［宰相は］言った。「帰るものか。この宝石と等価の品を手にするまでは。」

海の魔物は「私がくれてやろう」と言って、戻って行き、かの宝石と等価の品を持ってきた。宰相は［それを］手に取ると、笑った。海の魔物は言った。「何を笑っているのだ？」

［宰相は］言った。「海のものどもの知性を笑ったのだ。私に周海を枯らしてしまう能力があるとおまえは思っていたのだから。」

［魔物は］言った。「私は［そのことは］恐れてなどいなかった。そうではなくて、おまえの志を恐れたのだ。おまえは懸命に探し求めていたからな。志によって様々なことが実現するからこそ、おまえの志を恐ろしく思ったのだ。」

知れ。［ディーヴの存在を］認めない者は、ディーヴの所業を大げさに語り、［その上で］それを声高に否定する。だが、そのような者がイブリースに関する出来事や、天から追放された天使たちの話を耳にすると、何も言えなくなってしまう。すなわち、イブリースがその姿を変えられてしまったことや、ハールートとマールート[16]が罰を下された、といった話である。

＜逸話＞

15）世界を環状に取り囲む海（オケアノス）のこと［本訳注（4）、484、496頁他］。

16）人間と違って堕落しないと自らを過信していた天使たちを試すため、神が選んで地上に送り込んだ2人の天使。結局、彼らは女性の色香に迷って殺人を犯してしまい、バービル（バビロン）で鎖に繋がれて罰を受けたという。なお、両天使はイラン的伝統がイスラームに取り入れられた例として知られ、その起源はゾロアスター教、さらには先史時代のインド・ヨーロッパ語族が崇拝した神格にまで遡るとされる［矢島洋一「イスラーム思想におけるイラン的要素」堀川徹編『知の継承と展開――イスラームの東と西』明治書院、2015年、45–69頁］。

アゥマシュ（A‘maš）[17] は言う。ムジャーヒド（Mujāhid）[18] はハドラマウトに行き、バラフート[19] の洞穴で1人のユダヤ教徒に「私はハールートとマールートに会いたい」と言った。［ユダヤ教徒は］彼を広大な荒野へと連れて行き、大きな岩を取り払った。そこには巨大な地下空洞があった。ユダヤ教徒は、「私から手を離すな。神の名は口に出すな。もしも神の名を唱えたら、災いがおまえに降りかかるぞ」と言った。彼らは開けたところに着いた。何本もの鎖で逆さまに吊るされたハールートとマールートがいた。山ほどもある体にはたくさんの金具が巻きつけられ、口からはいくつもの舌が出ていた。舌先が触れるのは海水であり、［彼らの］渇きは癒えなかった。ムジャーヒドは恐ろしくなって、「**アッラーの名にかけて**」と言った。（p. 492）ハールートとマールートは、偉大で栄光ある神の名を聞き、［激しく］動揺した。そして、金具を引き寄せて断ち切ってしまった。ユダヤ教徒は出口に向かい、ほうほうの体で外に這い出た。ユダヤ教徒はムジャーヒドを非難して言った。「奴らは創造主の名前を恐れるのだ。我々を殺そうとしたんだぞ。」

「**あなたがたは落ちて行け。あなたがたは、互いに敵である**」［Q2: 36］という章句の注釈で言われているところでは、イブリースとともに堕ちたディーヴの集団がいた。彼らは、いまだに天を目指している。しかし、天使たちが［彼らを］通さない。「**盗聴し得た者があっても、白熱の炎が追跡する**」［Q37: 10］という［章句の］意味は、次のとおりである。ディーヴたちは天を目指している。［だが］火炎が彼らに注がれるため、彼らは追い払われ、変異してしまう。［ディーヴの］一部は荒野へ落ちる。それらは「グール（魔物）（ġūl）」や「スィゥラート（女魔物）（si‘lāt）」と呼ばれる。また、一部は海へ落ち、それらは「ティムサーフ（ワニ）（timsāḫ）」と呼ばれる。

＜問答＞

「彼らには一度炎が降り注いだというのに、どうして［ディーヴたちは］教訓を得ることなく再び天を目指したのか」と尋ねられたならば、こう答えよう。「天を目指しているのは、［かつて天から追放されて］帰ろうとしている者でなく、また別のディーヴなのだ」と。

至高なるアッラーは、スライマーンが死んだときのように、彼らに隠していらっしゃるのである。彼（スライマーン）は杖に寄りかかっていたが、ディーヴたちは［参じて］彼の周りを回り続けた。長い時が経ち、やがて杖は腐ってしまったほどであった。またムーサー――**彼に平安あれ**――とイスラエルの民が40年間ティー砂漠にとどまり続けたように。そこは［広大な］荒野のようであり、彼らは前にも後ろにも道を見つけることができなかった[20]。ディーヴの状態とはまさにそのようなものである。たとえあるものが［炎に］焼かれ、灰塵に帰するのを目にするとしても、他のものたちは教訓を得ることなく天を目指すのである。アーダムの子ら（人間）の行いも似たようなものである。互いの死から学ぼうとはせず、現世［やその富］は誰にも委ねられることがないとわかっていても、より多くを望み、［死に対して］無頓着になるのである。

17）Sulaymān b. Mihrān Asadī Kūfī（765年没）。イスラーム初期の伝承学者、『クルアーン』読誦者。彼に読誦を教えた人物の中に、本文で後述されるムジャーヒド（次注参照）がいる［*EI*²: al-A‘mash］。

18）Mujāhid b. Jabr al-Makkī（718–722年頃没）。アゥマシュの『クルアーン』読誦学の師であり、『クルアーン』注釈学者としても知られる。『クルアーン』で述べられている驚異を調査するために世界中を旅し、バービルでハールートとマールートに会った、という記録が残されている［*EI*²: Mudjāhid］。

19）ハドラマウトにある洞穴。不信心者の魂が集まると言われる。本訳注（4）、243頁、注69も参照のこと。

20）イスラエルの民がエジプトを出てからカナンにたどり着くまでに40年を要したことについては、本書第7部にも記述がある［本訳注（8）、297頁］。

預言者が現れるときには、その人物の誕生時に何らかの徴が見られる。たとえば、アブドゥルムッタリブの時代[21]に［起こったことや］、象の所有者[22]［の一件］や彼のラクダの膝から水が出てきたことは、選ばれし者（ムハンマド）――**彼に平安あれ**――が出現する時期を示す兆候であった。［そのようなことは］彼以前にはなかったことである[23]。

（p. 493）さて、天を目指すディーヴたちは互いの上に乗り、やがて天の縁にまで達する。その後、彼らの先頭に立つイフリートが天使たちから話を聞き、もし焼かれなければ種々の情報を持ち帰って占者に話す。占者は一を百に誇張して世界を混乱に陥れる。創造主がジンの言葉の１つとして「**これは強い護衛の燃え輝く星（流星）で一杯であることが分った**」［Q72: 8］とおっしゃっているのがまさにこれに当たる。ジンたちはイフリートに「天について何を聞いたのですか」と尋ねる。［イフリートは］言う。「天は、火を投げつける強力な護衛たちで一杯であることがわかった」と。

またディーヴは、火と煙から創られたと言われている。**至高なるお方のお言葉に、「また火の炎からジン（幽精）を創られた」［Q55: 15］とあるように**。もし光から生まれる純粋なものであったならば、それは天使となっていたであろう。また幽玄（laṭīf）なジンもいる。一部の者は、ジュルフム（Jurhum）族[24]はディーヴの後裔であると言うが、天使の後裔であると言う者もいる。彼らはその理由を、「**人間にもジンにも、これまで触れられていない**」［Q55: 56］［という章句］に求める。［ここに］描かれたものは、ハーティフ（Ḫaṭif）の姿である［図］。

＜悪鬼ヤームの図＞

ヒムヤルでディーヴが現れた。［そのディーヴは］「ヤーム（Yām）」と呼ばれ、ある建物の中に納まった。人々はその建物を尊崇し、犠牲を捧げるようになった。その建物は「ヤームの聖堂（Kanīsa al-Yām）」と呼ばれた。その中にいたディーヴは人々を惑わし、大きな声を発しては驚くべき情報（予言）を伝えていた。イエメンの帝王に［その］知らせが届き、トゥッバゥ［王］に「ディーヴがこの集団をたぶらかしています」と伝えられるところとなった。［トゥッバゥは］命じて、その建物を破壊させ、巨大な岩石からなる土台を掘り起こした。すると、黒い犬がギーギーと吠えながら出てくるのが見えた。犬は殺された。その建物の跡はイエメンに残っている。**これがヤームの姿である**［図］。

［悪鬼アクワーン］

さて、悪鬼アクワーンの伝承については、次のように言われている。ザールの子ロスタムが炎のような１頭のロバを目にし、その後をついていった。［ロバは］姿を消したが、［ロスタムが］海辺に達すると姿を現した。ロスタムはそのロバがディーヴだと気づき、（p. 494）山へ逃れた。アクワーンはロスタムを捕らえると、言った。「おまえを山に投げつけてやろうか。それとも海にか？」

［ロスタムは心のなかで］言った。「もし私が山に投げろと言えば、こいつは海に投げるだろう。

21）おそらく、所在がわからなくなってしまっていたザムザムの泉をアブドゥルムッタリブが再発見したことを指しているものと考えられる。この伝承については、イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』（後藤他訳）、第１巻129–135頁を参照のこと。

22）『クルアーン』105章に彼らについての言及がある。アビシニアのイエメン総督アブラハがメッカに来襲したが、鳥の大群が石を投下して彼らを撃退したという伝承に基づくものである。

23）この一段は預言者出現時の兆候の話であり、ジンやディーヴとは関連しないため、この箇所に挿入されているのは不自然である。サーデギー校訂本ではこの一段は削除されている。

24）イエメンに起源を持つとされるアラブの一部族［*EI*²: Djurhum］。

だが、もし私が海に投げろと言えば、こいつは山に投げ、私はばらばらになってしまうだろう。」

［ロスタムは］言った。「山に投げろ。」

［アクワーンは］彼を海に投げた。ロスタムが［海から］上がると、アクワーンが現れた。ロスタムは創造主の名を唱えてアクワーンを剣で切りつけた。剣はその皮を引き裂いた。皮の中から醜悪な姿をした強力なディーヴが現れた。ディーヴは腕っぷしが強かったが、ロスタムは格闘の末、アクワーンを殺した。

このような話が伝えられているが、ディーヴを殺すのは不可能であるという点については保留する。確かに多くの書物で［ディーヴを殺す話が］語られているものの、真正とは言えない。

＜天使と人間との混淆は可能であるか、否か＞

知れ。創造主のお力のもとでは、これ（天使）が［人間と］結合することは驚くべきことではない。ジブリール――**彼に平安あれ**――の息からイーサー――**彼に平安あれ**――が生じたことのように。ジブリールのひと吹きは彼（イーサー）が昇天するときまで彼の中に留まり、［それによってイーサーは］死者を生き返らせていたのである。

［逸話］

次のように言われている。双角の所有者にはカイリー（QYRY）という名の人間の母親がいた[25]。一方、彼の父親は天使であった。［その天使が］カイリーにひと息吹きかけ［彼女は身籠っ］た。カイリーは子を産んだとき、ルームの女王であった。彼女は非難を恐れて息子をとある地方に送った。双角の所有者は成長し、世界を征服した。大地から跳び上がって雲に乗るほどの力を持っていた。彼は地上の東方から西方まで［世界中を］めぐり、果ては「闇の世界」にまで行った。そこは地面から天まで煙が立ち込め、太陽の光が届かないところであった。

そこで彼は学識者たちを集めて「闇の世界を通ってみたい」と言った。学識者たちは、「40年かければ通過できます」と答えた。彼は軍に布告を発し、老いた者を引き返させ、若い者には40年分の糧食を担がせた[26]。

軍の中に1人の若者がいた。彼には老いた父親がいた。この若者は父親を箱のなかに隠した。闇の世界の入り口に来たとき、双角の所有者は、「我々が戻ろうと思っても、道は見つからず、途方に暮れてしまうだろう」と言い、そして、「我々の中に古老がおれば良かったのに。（p. 495）そうすれば妙案を出してくれていただろうに」と言った。

軍の者たちは、「老人を連れてきた者には大金が与えられるぞ」と触れ回った。かの若者は父親を箱から出した。［老人は］言った。「おお、双角の所有者よ。あなたをたとえるなら、さながら次のような王である。ある町に行ったとき、彼は雄鶏の鳴き声を聞いて、『すべての雄鶏を殺すように』と言った。だが夜明けになると、『ああ雄鶏がいたら、鳴き声を上げるので朝の刻を知ることができたのに』と言ったのだ。」

双角の所有者は言った。「私が間違っていた。この闇の世界に対する方策はいかに？」

「仔馬を1頭ここに連れてきて放置し、雌馬だけを同行させられよ。引き返すときに雌馬を先頭

25）本書では、イスカンダルの母親の名は「アンムーリーヤ」である（本訳注（8）、320頁、注146も参照のこと）。一方『動物誌』には、双角の所有者の母として同じような名前が挙げられているが、写本によってQYRY、QBRY、FYRYなど異なっており［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 1, p. 188, vol. 4, p. 69］、正確な綴り・読みともに明らかではない。

26）以下の話は、本訳注（4）、500–501頁に既出。

に立たせたならば、雌馬は仔馬の匂いで仔馬のもとへ至りましょう」と［老人は］答えた。

双角の所有者は言った。「いかなる集団であろうと、古老なくして解決策を得ることはかなわぬものだ。」

この逸話の意図は、双角の所有者は天使の吐息によって生み出された、という点にある。

また次のように言われる。彼（双角の所有者）は世界をめぐり、自らの父と母について尋ね回った。だが何もわからなかった。やがてルームに至り、その地の人々と戦った。彼らの王は女で、アンムーリーヤという名であった。双角の所有者〔は彼女〕を捕らえた[27]。この女が双角の所有者を目にすると、乳房から乳が流れ出た。彼女は双角の所有者の顔にあった印から、彼が自分の息子であると見極め、王国を彼に委ねた。だが［双角の所有者は］父親については何も知らないままであった。すると母親が言った。「1 人の天使が私をつかみ、私の口元に息をかけ、口の中に息を吹き込みました。そして私はあなたを身籠りました。私は人々を恐れてあなたを捨ててしまいました。」

こういったことが彼について語られている。**アッラーこそが最もよく知りたまうのだが**、これは［双角の所有者ではなく］、イーサーの特徴である。

次のような［双角の所有者の］話もある[28]。ある人がウマル・ブン・アル＝ハッターブに、「おお、双角の所有者よ」と言った。ウマルは、「**おまえたちは**［私を呼ぶのに］**預言者の名前どころか、天使の名前さえも持ちだすのか**」と言った。すなわち、双角の所有者は天使に属するのである。

選ばれし者たるアリーは、双角の所有者について尋ねられ、「**体毛のない天使である**（al-malak al-amraṭ）」と答えた。

また、スライマーンの妻であるビルキースの母はジンであり、父は人間であったと言われる[29]。（p. 496）このことは様々な書物に記されている。さらに、ジュルフム族はジンの後裔であると言われている。

一部の人々の見解に基づき、私が見つけ出したものについて［ここに］述べたまでである。

＜ジンの種類について＞

知れ。ジンには様々な等級があり、より幽質であるものほど位階が高く、天上界にまで達するものもいる。それは、霊的なもの（聖霊）（rūḥanī）や聖なる霊魂（rūḥ al-quds）［に等級があるの］と同様である。彼らはあらゆるものの中で最上位にいるが、上位にいるものはさらにより幽質であり、聖霊たちでさえも彼らを見ることができない。彼らの上には楽園の住人（fīrdawsī）がいる。我々がジンを見ることができないのと同じように、ジンもまた聖霊を見ることはできない。

また、どの占い師にもいずれかのジンがついている。キリスト教徒たちは、「**彼にはダカーラー（DKALA）の霊魂がついており、彼にはシャブカル（ŠBQR）の霊魂がついている**」と言う。ユダヤ教徒たちは「**彼にはバアル・ゼブブ（Ba‘al-zabūb）[30] の霊魂がついている**」と言う。使徒たちについ

27）lā 写本に従い、補った。

28）以下のウマル、アリー、ビルキースの逸話については、『動物誌』に同様の記述がある［al-Jāḥiz, *al-Ḥayawān*, vol. 1, pp. 187–188］。なお、ウマルの逸話にある 2 つ目のアラビア語の文章についてはテキストに混乱が見られるため、『動物誌』の記述に従って訂正した。

29）ビルキースがジンの母と人間の父から生まれたことについては、本書第 4 部で既出［本訳注（5）『イスラーム世界研究』第 5 巻 1–2 号、2012 年、396–397 頁］。

30）テキストでは BLĠRWB となっているが、巻末の訂正表に従った。バアル・ゼブブは「ハエの王」あるいは「ハエ

ては、「**彼には聖霊がついている**」と言われる。

［ハーティフとシック］

知れ。ジンには「ハーティフ（hātif）」[31] と呼ばれる種族がいる。それは夜に姿を現し、大声で叫び、様々な知らせ（予言）を告げる。たとえば、「マンスールが死んだ」と、人々がバスラでアブー・ジャァファル・アル＝マンスールの死を聞かされ、日誌（tārīḫ-i rūz）に［そのことを］書き込んだまさにその瞬間に、マンスールは死んだ。

また別の種は「シック（半裂け男）（šiqq）」と呼ばれ、これも姿を現し、大声で叫ぶ。アルカマ・ブン・サフワーン・ブン・ウマイヤ（‘Alqama b. Ṣafwān b. Umayya）はマッカに向かっていたが、そのとき彼は棍棒を携えていた。両聖都の聖域（ḥāyiṭ-i ḥaramān）に達したとき、彼はシックを見た。シックは剣を持っていた。アルカマ[32] は「私は殺される」と言った。するとシックは「**おまえが持っているものは私のものだ**」と言った。そして2人は互いに傷つけあった。［その後］アルカマは死体で見つかった。

ハルブ・ブン・ウマイヤ（Ḥarb b. Umayya）[33] の場合も同じく、あるハーティフが彼に対して大声を浴びせたところ、ハルブは死んだ。ハーティフは言った。

ハルブの墓は荒涼地にある　　ハルブの墓の近くに墓はない

この対句はディーヴが詠んだものであり[34]、3回続けて詠唱することはできない。

（p. 497）＜逸話＞

知れ。ある晩、ニザーム・アル＝ムルク・アル＝ハサン・ブン・イスハーク[35] が一団の者とともに歩いていると、頭の大きい真っ黒な犬が路上に居座り道を塞いでいるのに出くわした。ニザームは怖くなって立ち止まった。彼と一緒にいた者たちも何か恐ろしいものを感じて立ち止まった。するとその犬は、「ニザームは当代の幸運なる［星回りの］合の所有者（ṣāḥib al-qirān）[36] である」と言い、道から離れて姿を消した。しばらくの間、こうして［何事もなく］時が過ぎた。ある晩、再びこの犬が現れ、道を塞いだ。そして、「**幸運なる合の所有者ニザームは墓の所有者となった**」と言い、姿を消した。ニザームは怖くなり、多くの喜捨を施したが、1週間後に現世から旅立った。

のバアル」を意味するヘブライ語。もともとはペリシテ人の都市エクロンの豊穣神である「バアル・ゼブル」がイスラエル人によって蔑称化されたもので、『列王記』などで言及される。なお、バアル・ゼブルは「崇高なるバアル」を意味し、紀元前のシリア・パレスティナ地方で広く崇拝された男神バアルの別名と考えられている。バアル・ゼブブは、『新約聖書』にも「ベルゼブブ」あるいは「ベルゼブル」という形で現れ、悪魔の別称の1つとされる［「列王記下」1: 2-16;「マタイによる福音書」12: 22–32;「バアル」「蠅」「ベルゼブル」『世界宗教大事典』（平凡社、1991年）］。

31）ハーティフと以下に見られるシック（半裂け男）の逸話については、ジャーヒズの『動物誌』に類似した記述が見られる［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 6, pp. 203, 206–208］。

32）テキストでは ‘LQH とあるが、『動物誌』の記述に従い、‘Alqama と解釈した。

33）アブー・スフヤーンの父。アブド・シャムス家の長として、メッカで指導的立場にあった人物の1人。ハーシム家のアブドゥルムッタリブ死後、クライシュ族の戦闘指揮官の地位を引き継いだ［*EI*²: Ḥarb b. Umayya b. ‘Abd Shams］。

34）音写すると、この対句は、“wa qabru Ḥarbin bi-makāni qafrin, wa laisa qurba qabri Ḥarbin qabrun” となり、似た響きの語をいくつも連ねる独特の詩となっている。

35）セルジューク朝の3代の君主に仕えた著名な大宰相。ニザーミーヤ学院を建設してウラマーの養成とスンナ派復興に努め、著書『統治の書』などを通じて、当時イランで活発な宣教活動を行っていたシーア派の一派、ニザール派との対決姿勢を示したが、1092年に最終的に同派の刺客によって暗殺された［「ニザーム・アル＝ムルク」『岩波イスラーム辞典』; 本訳注（5）、439頁、注396］。

36）占星術・天文学で幸運の星とされる金星と木星の「合（qirān）」に由来する称号［*EI*²: Ṣāḥib qirān］。

＜［様々な］ジンの種族について＞

知れ。ディーヴのあるものは醜く、あるものは美しい。またあるものは黒く、あるものは白い。南の方にいるものはいずれも黒く、北の方にいるものは白い。彼らには「距離」というものはなく、一瞬のうちに東から西へ行く。しかし、彼らは各々の領土を持っており、あるものが他のものの領土に入ることはない。

＜逸話＞

ある者は次のように言う。「私がコヘスターンのある地方にいたときのことである。ジャンドゥーク（Jandūq）と呼ばれる村があり、その村は城砦のように山頂に位置していた。明け方、見晴らしの良い場所で私が座っていると、2人の男が荒野からやってくるのが見えた。彼らは近づけば近づくほど、背丈が伸びていった。城砦の近くまでやって来ると、彼らは城砦の周りを駆け回った。そして村の壁の上に足を置き、かまどの中に入っていった。その晩、私は「これは夢か現か」と深く考え込んだ。夜が明けると、1人の女が私のところにやってきて、私にこう言った。『昨夜、2人の男がこの城砦の上まで登り、このかまどの中に入っていくのを見ました。私は怖くなり、（p. 498）かまどにふたをしました。今日そのふたを取ってみたところ、2羽のツバメがそこから飛び立ちました。』」

この逸話が意味することは次のとおりである。ディーヴやジンは望むままにあらゆる姿で現れ、一瞬のうちにある世界から別の世界へと移る。このことはたとえ理性ある者にとっては受け入れがたいものであっても、公平に判断し道理に沿って考えれば、ディーヴやジンの所業が偽りではないとわかるであろう。

ファールスの地方やスライマーンの王冠の地（都）[37] を訪れた者は、「**高殿と彫像や池のような水盤**」［Q34: 13］がディーヴの仕業であると知るであろう。「ジャムシードの城（Qaṣr-i Jamšīd）」と呼ばれる場所には、千本もの円柱が何行程にもわたって建てられているのを目にすることができる。各々［の柱］は48アラシュもの高さがあり、太さは4人の男が手を繋いでも囲むことができないほどである。アーダムの子ら（人間）の力ではこれを据えることはできない。当時のことについて、そのようなものは巻き上げ機（jarr al-ṯaql）で造ったのだと多くの者が主張したが、［実際には］できなかった。それゆえ、これはシャイターン（悪魔）（šayāṭīn）の力によって造られたことが明らかになったのである。またその場所には、黒い岩から造られた宮殿があり、ダイラム人や男奴隷の石像が彫られている。ダイラム人の縮れ毛やテュルク人の巻き毛は言葉にできないほど［精巧］である。［実際に］目にしなければ、この驚異はわかるはずもなかろう。1つが1万マンもの重さの石がいくつも積み重ねられており、2つの石の間には髪の毛1本すら入らない。またこの〔都〕には、2体の海の魔物が彫られている。それらは牛の蹄を持ち、人間の体をしており、長い顎鬚がある。縦横は12アラシュであり、重さは神のみぞ知る。1つは一方の隅にあり、もう1つは他方の隅にある。

この話の意図は、現在このようなことは人間には不可能である、という点にある。もし、ディーヴや妖精が為したと言うならば、理性はそれを認めるべきである。

37）ファールス地方のスライマーンの都とは、ペルセポリスを指す。以下の「ジャムシードの城」も同様。本書に見えるペルセポリスについては、守川知子「ペルセポリス――イスラーム世界の七不思議」山中由里子編『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』名古屋大学出版会、2015年、317–326頁も参照されたい。なお、段落末尾の「2体の海の魔物」は、ペルセポリス入口の「万国（クセルクセス）の門」に彫られた人面有翼獣神像であろう。

＜逸話＞

マフムード・［ブン・］ワッラーク　（Maḥmūd-i Warrāq）[38] は次のように述べている。「私はガズナの地方にいる父方のおじから次のような話を聞いた。400 人もの男たちによって、水車の導管を作るための巨大な木が運びこまれた。夜になり、男たちは去って行った。次の日、その木はなくなっていた。あちこち探し回ったが見つからなかった。遠くまで探しに行くと、（p. 499）［その木は］ある山上の洞穴の入り口に打ち捨てられていた。その木は今もそこにある。1000 人がかりで長い時間をかけてもその木を動かすことはできないと彼らは判断した。ゆえに彼らは、『あれはディーヴの仕業だ』と言い合った。」

続いて、ナスナースとグールとは何かについて述べよう。

［第２章］　ナスナースについて

知れ。ナスナースはディーヴの一種であり、地方ごとに［その地方］特有の言葉や姿かたちをしたものがいる。

ブルール[39] の境域には野蛮なナスナースがおり、ナツメヤシ［の木］ほどの大きさがある。誰かがそのうちの 1 匹を殺せば、［殺した］者の部族から 10 人が報復として殺される。もし小さな村であれば、壊滅させる。その地には大きな川があり、ナスナースが川に落ちると、つがいの雌はその場所で長い間泣き暮らす。彼らの体はふさふさした毛で覆われており、噛みついてくる。この集団は「悪鬼人間（dīw-mardum）」と呼ばれる。

＜逸話＞

カートゥール（Qāṭūl）[40] の境域には、ロバのように長い首をしたナスナースがいる。ある人物は次のように語っている。

私がカートゥールに向かう途中、「**私はイスラームにおけるおまえの兄弟だ。私を解放してくれ**」という叫び声が聞こえた。見ると、1 人の男が木から吊り下げられていた。解放してやると、彼は去っていった。私がカートゥールの王のもとに到着すると、王は男奴隷（グラーム）に、「行って獲物を持って来い」と命じた。［男奴隷は］「この男が奴を逃がしました」と答えた。私が、「アラビア語を話す男を見かけたので、木から降ろしてやっただけです」と言うと、［王は］言った。「奴はナスナースだ。」

ナスナースはそれぞれの土地の言葉を話す。

＜逸話＞

38）本文では al-WZAN となっているが、サーデギー本に従って訂正した。マフムード・ワッラークはガズナ朝君主マフムード時代の歴史家で、世界の創造からヒジュラ暦 409 年（1018/19 年）に至る歴史書を残した人物である。なお、有名な『バイハキー史』の著者バイハキーは自身の作品について、このマフムード・ワッラークによる歴史書の続き、すなわち 409 年以降の出来事から記述したと述べている［Muḥammad b. Ḥusayn Bayhaqī, *Tārīḫ-i Bayhaqī*, 2 vols., Ed. M. Yāḥaqqī, M. Sayyidī, Suḥan, Tehran, 2010, vol. 1, p. 260, vol. 2, pp. 1040–1041］。

39）マーワラーンナフルの一地方名。本訳注（7）『イスラーム世界研究』第 7 巻、2014 年、506 頁、注 16 参照。

40）サーデギー本に従う。カートゥールはイラクのカーディスーヤの近くを流れるティグリス川の支流で、ハールーン・アル＝ラシードの命で掘削された水路の名称である［Yāqūt, *Muʿjam al-buldān*, vol. 4, p. 297］。ここでは、この水路が流れていた地域のことを指しているか。

ワリード・ブン・ムスリム[41] は次のように述べている。

我々は、顔と首が傷だらけの人物に出くわした。彼はこう語った。「私はある島に漂着しました。犬の顔をした部族が現れ、私を捕らえると（p. 500）屋敷に連れて行きました。私は、［そこで］1つの釜が煮立っているのを目にしました。釜の中は人間の肉と骨で一杯でした。それらはその地に漂着した人々のものだったのです。建物の中に入ると、［牢に］つながれた1人の人間がいました。彼は言いました。『おお、哀れな人よ。どうしてこの地に流れ着いてしまったのか。あのものどもは人食いだ。この建物もかつては人間で一杯だった。痩せていたおかげで私だけが生き残ったのだ』と。」

［傷だらけの男は続けて］言った。「私は［しばらく］その島にいたのですが、ある日彼らは荒野に出かけて行きました。牢につながれた男が言いました。『あそこに藪がある。その中に何とかという木がある。その木の下にいれば、誰にも見つかることはない』と。」

［傷だらけの］男は飛び出して木の下に逃げ込んだ。やがて彼らは帰って行った。こうして彼は逃げのびることができた。

この［傷だらけの］男は次のようにも語った。「私はカートゥール[42] の地方に行ったとき、荒れ果てた土地に辿り着きました。美しい姿の一団が座っているのを目にしました。彼らの足は短くて弱々しく、長い尻尾がありました。［そのうちの］1匹が飛びかかってきました。尻尾を私に巻きつけ、爪で私の首をつかんだまま、1日中私を歩かせました。そうすることで、彼は木の実を食べることができたのです。［あるとき］私はブドウを搾りました。その果汁はやがて酒になりました。ブドウ酒を与えると、彼の手足は麻痺して倒れこんでしまいました。私は何匹か殺し、その地から逃げ出すことができました。」

＜逸話＞

アフマド・ブン・ハラフ（Aḥmad b. Ḫalaf）[43] は次のように述べる。

イエメンに行ったとき、私は王のもとに滞在した。肉が置いてあり、王が焼いて食べ、私にも分けてくれた。そこにいた者たちは「狩りで得た肉だ」と言った。ある日、私は王と一緒に狩猟に出かけた。みなは洞穴に入っていき、猟犬たちは私に預けられた。私は1本の腕と1本の足で駆けてくる老人を目にした。老人は私に、「**所用で立ち去ろうとしているおまえのか弱き従兄弟を見逃してくれ**[44]」と言った。私は「行け」と言った。猟犬が彼に襲いかからんばかりの勢いだったので、私は首輪を強く握りしめた。やがて男奴隷たちが到着し、「獲物はどこに行った」と尋ねてきた。私は「1人の老人が通り過ぎただけだ」と答えた。彼らが「犬を解き放て」と言ったので、私は放った。犬たちはあの老人を［別の］洞穴から追い立ててきた。彼らは、「こいつは［人間ではなく］獣の仲間だぞ」と言った。

このような様々な逸話が伝えられている。たとえそれらが理性から程遠いものであろうとも、いくつもの地理書（kutub-i aqālīm）に書かれており、様々な歴史書（tawārīḫ）に紙幅を割いて詳しく記

41）ダマスクスの伝承学者（810年没）［本訳注（7）、501頁、注3］。

42）テキストではQAṬWRと表記されているが、前出のカートゥール（Qāṭūl）と同じであろう。

43）これと類似した話は第7部のナスナースの項にあるが、そこでは伝承者はフサーム・ブン・クダームなる人物である［本訳注（8）、315頁］。

44）アラビア語のこの一文は、巻末の訂正表に従う。文中の「従兄弟（ibn ʻamm）」という呼びかけについては、アラビア語では実の甥でなくても年少者に対して親しみを表す表現としてしばしば「甥」と呼びかけることがあることから［イブン・イスハーク『預言者ムハンマド伝』（後藤他訳）、第1巻34、525頁］、それに準じた表現であろう。

されている。私はそのうちのいくつかを述べたまでである。（p. 501）彼らは人間の血筋を引いているのかもしれないし、ディーヴの血筋が混ざっているのかもしれない。アラブ［の人々］は彼らを「シック」と呼び、アジャムは「ナスナース」と呼ぶ。

［第３章］　グール各様

グールについては様々な逸話が語られている。グールはディーヴの一種で、人を惑わし、正道から外れさせる。人間を食べ、気性は野獣［そのもの］である。

次のように言われている。東方で、毎年１匹のグールが荒野から現れ、人間を１人攫っていった。［そこには］１本の川が流れる快適な町があったが、人々は話し合ってその町を捨て去ることにした。彼らは移住し、別の町を建てた。数年が過ぎた。グールが町の壁の上に現れて、言った。「［なぜ］おまえたちはあれほどまでに美味な水と清浄な空気がそろった町を捨て去り、荒野と苦い水を選んだのか？」

人々は言った。「グールが怖かったからだ。奴は毎年人間を１人攫っていったから。」

［グールは］言った。「今年は死が何人［の命］を奪ったのだ？」

「1000人だ」と彼らは言った。

［グールは］言った。「どうして１年のうちに１人攫っていくだけのグールから逃げたのに、1000人も奪う死から逃れようとしないのだ？」

さて、グールには様々な種族がおり、彼らについては多くの逸話が語られている。荒野で人々を迷わせるグールもいる。

アブー・ヤズィード・アル＝ナフウィー（Abū Yazīd al-Naḥwī）は次のように述べている。「1匹の雌のグールがタミーム族[45]の中で暮らしていた。［ある日］彼女は息子を産んだ。突然、グールたちの地方から稲妻が走った。彼女もまた悲鳴をあげ、跳び上がって自分の地方へ向かっていった」と。

また、グールは自らをあらゆる姿に変えることができる、と言われている。ただし足だけは別で、ロバのような足のままである。「スィゥラート」は雌のグールを指し、雌は美しい姿をしているが、雄のグールは醜い。雌のグールは人を迷わせ、誘惑する。顔を見せて［たぶらかすと、それを］雄のグールが殺す。

＜逸話＞

ハンジュ（ḤNJ）という人物は次のように語った。「私は某という荒野を進んでいたとき、（p. 502）山の頂に座っている人物と出会った。彼は自分の前に多くの宝石を撒き散らしていた。彼は、『これはサァド・ブン・ヒシュリム（Sa‘d b. Ḥišrim）からの預かりものだ。彼以外には誰にも手を触れさせない』と言った。」

ハンジュは続けた。「私はその部族のところまで出向いた。彼（サァド）に知らせて、その場所ま

45）北アラブ部族の１つ。イスラーム以前はアラビア半島中央部のナジュドを拠点としていたが、イスラームの大征服とともに勢力を拡大した。ウマイヤ朝期やアッバース朝期にはイラク南部やオマーン、バフラインなどで大きな影響力を有し、それらの地域の総督を多数輩出した［*EI*²: Tamīm b. Murr］。

で連れて行った。[サァドが] 山に登ると、男は彼に宝石を渡した。[サァドが宝石を] 持って降りてきたので、私は、『おまえを案内したのはこの私だ。分け前をくれ』と言ったが、彼はくれなかった。」

この [ハンジュなる] 男は続ける。「私は頭に来て、剣で切りつけて彼を殺した。彼の血が流れると、山の頂にいた男が恐ろしい形相で降りてきた。そして、死体に近寄ると、それを食べ始めた。私はその男がグールだと気づき、宝石を残して逃げ出した。グールは彼を食べ尽くしてしまった。」

知れ。このような類の逸話は数多く語られている。私はある人から次のような話を聞いたことがある。

彼いわく、「我々は3人で荒野や山岳地帯を進んでいた。夜、我々の前に何かが現れた。それは象ほどに大きく、我々に襲いかかってきた。我々は逃げた。そいつは馬のような叫び声をあげた。我々は穀物 [畑] の中に隠れた。そいつは追いつくと、我々の前に立ちふさがった。我々はそこから逃げて、ある村の門まで行って助けを求めた。村の門が開き、我々が中に入ると、そいつはいなくなった。」

グールは1つの傷で死んでしまうと言われている。[だが] もう1つ傷をつけられると死にはせず、生き返る。そうなると、千の傷をつけられても死ぬことはない。**次のように言われている。サルが人間の変種であるのと同じく、グールはジンの変種である、と。**グールは完全な妖魔 (parī) ではなく、完全な野獣でもない。それは、類人猿 (būzīna) が完全な人間ではなく、完全な獣でもないのと同じである。大半のグールは荒野にいる。

＜逸話＞

次のように言われる。ある男が荒野をさまよっていると、1人の女に出会った。彼女は長い巻き髪で、ヴェールを頭から目の縁まで垂らしていた。男が言った。「おお、女よ。おまえは誰だ？」

「私は道に迷ってしまった者です」と [女が] 言った。

(p. 503) 男は「私も道に迷ってしまったのだ」と言って、彼女を自らの馬に乗せ、連れて行った。

[しばらくすると] 女は [馬から] 降りて、手を洗うために土手の裏側に行った。男は、彼女の後ろからじっと見守っていた。すると、グールの一団が座っているのが見えた。彼らは女に言った。「獲物を連れて来たか？」

「今すぐに連れてくる」と [女は] 言った。

男は恐ろしくなり、馬を駆り立て、走らせた。その女は一瞬で追いつくと、男の後ろに座った。男は震え上がった。女が「なぜ震えているの？」と言うと、彼は「怖いのだ」と答えた。

「誰を怖がっているの？」

「敵をだ」と男は言った。

「その敵に挑んでみたら？」

「できない。」

「助けを呼んでみたら？」

「無理だ。」

「神に助けを求めてみたら？」

[男は] 言った。「**おお神よ、あなたにこそ助けを乞います。あなたこそ守護者です。**」

［すると］グールは馬から落ちて、両足を上にひっくり返った。男は［馬を］駆り立て、その難を逃れた。

＜逸話＞

次のように言われる。ある王子が獲物を追って荒野に入ってしまった。着飾った女を見かけ、彼女を［馬に］乗せた。彼女の足を見ると、蹄があった。彼は怖くなり、［女を降ろして、馬を］走らせ続けた。グールは彼のあとを追ってきた。走り続けるうちに、とうとうある部族のもとに行き着いた。［王子は］「この悪魔の手からの安全を［乞う］」と言って、天幕の中に入った。［すると］女は、「彼（王子）は私の夫で、私から逃げているのです」と言った。天幕の持ち主は、「もしおまえがこの女を必要としないのなら帰れ。私が彼女を娶ろう」と言った。彼は引き返した。女は［天幕の持ち主の］もとに留まった。2人は眠りについたが、真夜中になると、グールは天幕の持ち主のはらわたを食べ尽くし、その首を持ち去ってしまった。

グールについてはこの程度のことが言われているが、これで十分であろう。さて、次はグールの姿について述べよう。

＜グールの姿について＞

次のように言われる[46]。とある地方で、1匹のグールが僧の姿で現れた。客人をもてなし、（p. 504）人々を招待していた。彼は宿屋を建てていたが、その中には暗い建物があった。機会を見つけては客をその暗い建物に連れ込み、喰らっていた。長い時が過ぎるにつれ、人々は次々に消えていった。

ある日、2人の娘がある場所に向かっていた。彼は2人を招き入れ、食事を与えた。彼女らが帰ろうしたとき、1人を建物の中に連れ込んで始末した。彼女の妹は泣きながら家に帰り、「僧が私のお姉ちゃんを殺した」と言った。彼女の父は怒鳴り、娘を折檻した。そして［消えた］娘を探し求めた。ある日、彼は僧のところに行った。僧は言った。「歓迎するので来なさい。そうすれば、私の家が見られるでしょう。あなたの娘は、私が人喰いだと言いふらしているようですね。」

男は、僧の招きに応じた。その建物の扉を開け、覗きこむと、人の骨が見えた。彼は心の中で、彼の娘はこの僧が連れ去ったのだ、と思った。僧は「恐れるな。建物の中に入って、見るがいい」と言った。彼は入ろうとしなかった。僧は彼の背中に手を置いて家の中に突き飛ばし、彼をばらばらにした。

こういった話は、グールの不実さを物語っている。

＜ペルセウス（baršāwuš）の姿（ペルセウス座）[47]＞

さて、天文学者たちが言うところによると、恒星天にはグールの姿がある。北の極にある男の姿をした星座は、切られた首を持っている。左手に持つのがグールのそれ（首）である。この星座は、「ペルセウス」と呼ばれる。左足で立ち、右足は持ち上げている。この［星座を構成する］星々は26

46）ここで語られる逸話は、第7部で既出である［本訳注（8）、357頁］。

47）「ペルセウス」は別名「魔物（グール）の首を持つ人」と言われている［本訳注（2）、413頁］。魔物の目の部分にあるペルセウス座β星は「アルゴル」と呼ばれるが、これはアラビア語の「アル＝グール（al-ġūl）」の転訛であり、もともとは「グールの頭（ra's al-ġūl）」と呼ばれていた星である。また、以下の各星座については、本書第1部（本訳注（2）、413–415頁）も参照されたい。

個である。アラブ人は、これらを「血塗られた手(kaff al-ḫaḏīb)」[48]や「手首(mi'ṣam)」と呼ぶ。また、これらを「腕('aḍud)」や「肩('ātiq)」、「膝(ma'biḍ)」と呼ぶ者もいる[49]。右手に腕輪(mi'ṣam-band)をしているが、これは大きな星である。[この星は]「昴の腕輪(mi'ṣam al-ṯurayyā)」[50]と呼ばれる。グールの頭には4つの星がある。ペルセウスの姿はこのとおりである[図]。

＜ケフェウス(qīfāus)の姿(ケフェウス座)＞

知れ。プトレマイオスら、天文学の徒である賢人たちは、『天の図像(Ṣuwar al-falakī)[の書]』[51]に依拠し、[全天の星座の数は](p. 505)48であり、[北天と南天の]どちらの極にもあり、その一部は猛獣や野獣の姿をしていると考えている。だが、天使たちの場所である[天の]極に、「小熊」や「大熊」がいるという主張を我々は認めるわけにはいかない。それらは動物の章で言及しよう。また、一部は人間の姿であると言われるが、それらはこの章で言及しよう。

まず挙げられるのは、北の極(北天)にある「ケフェウス」であり、これは腕を広げた男の姿をしている。それは、[アラビア語で]「燃え盛るもの(multahib)」と呼ばれ、11の星からなる。その配置は、このとおりである[図]。その胸には「白炎(al-qurḥa)」と呼ばれる星がある。また、1つはへそに、1つは肩にある。それ(前者)は「群れ(firq)」と呼ばれる[52]。

＜シンバルを鳴らす者(al-ṣannāj)の姿(うしかい座)＞

また、次のように言われる。この極には「叫ぶ者('awwā)」、もしくは「シンバルを鳴らす者(ṣannāj)」と呼ばれる[男の]姿がある。それは12の星からなる。これは、右手に杖を持つ男の姿をした星座である。アラブ人は「スィマーク(simāk)」[53]と呼んでおり、それは偉丈夫な天の護衛である。というのも、天空で常に見ることができ、消えることがないからである。太陽の光によっても隠れない。**まことにアッラーは最もよく知りたまう。**

＜膝をついている者(al-jāṯī)の姿(ヘルクレス座)＞

また、この極には、「膝をついている者(jāṯī)」と呼ばれる男の姿がある。[男は]膝をついている。「踊る者(raqqāṣ)」とも呼ばれ、この[星座を構成する]星々は28である。アラブ人は「羊飼いの犬(kalb al-rā'ī)」と呼んでおり、それもまた「踊る者」の額にある[54]。

＜鎖に繋がれた女(al-musalsala)の姿(アンドロメダ座)＞

また、この極には、両手を鎖で繋がれた女の姿があり、それは「アンドロメダ(Andrūmīd)」と呼ばれる。それは23の星からなる。両腕が引っ張られた状態である。[足]先には輝く星があり、「雌ヤギ('anāq)」[55]と呼ばれる。また[別の]1つは腰にあり、大きく、「鎖に繋がれた女の脇腹(janb

48) カシオペア座β星(カフ)のこと。ペルセウス座の星とされているのは誤りであろう[本訳注(2)、437頁、注106]。

49) 最後の「腕」はma写本に従う。ここに挙がるアラビア語の名称については、ペルセウス座のζ星(アティク)、ν星(アダド)、κ星(ミサム)などにその名をとどめている。

50) ペルセウス座α星(ミルファク/アルゲニブ)のことか。

51) この書については、本書第1部でも本文中で言及されている[本訳注(2)、410頁]。

52) へそに位置するのが、ケフェウス座β星(アルフィルク)、肩に位置するのは同α星(アルデラミン)。

53) うしかい座α星(アークトゥルス)を指す。本訳注(2)、439頁も参照。

54) ヘルクレス座の額に位置するα星(ラス・アルゲティ)のことか。

55) アンドロメダ座の二重星であるγ星(アルマク)を指す。もともとはヤマネコの一種であるカラカルを意味する'anāq al-arḍ が「アルマク」の語源とされる。

al-musalsala）」や「大魚の腹（baṭan al-ḥūt）」と呼ばれる[56]。

＜双子（taw'amayn）の姿（ふたご座）＞

「双子（taw'amayn）」は2人の男の姿をしている。彼らの頭は北東にあり、足は南西にある。それは18の星々からなる。［星の］あるものは「伸びた腕（ḏirā' al-mabsūṭa）」と呼ばれ、あるものは「掴まれたもの（maqbūḍa）」と呼ばれている[57]。これ（この星）は「涙を流すシリウス（ši'rā al-ġumayṣā）」[58]であり、月宿である。

＜御者（'annāz）の姿（ぎょしゃ座）＞

「御者（'annāz）」は立った男の姿をしている。それは14の星々からなる。（p. 506）「兵士の肩（mankib-i jayš）」[59]の上には「洒落者（カペラ）（'ayyūq）」がある。「洒落者」は「昴の監視者（raqīb al-ṯurayyā）」と呼ばれる。

［第4章］　イブリースやイフリートたちよりも幽質であるジンについて

知れ。ジンには、シャイターンよりも幽質のものがいる。その姿はより美しく、より魅惑的で、人々をたちどころに欺いてしまう。ジンによる騒擾は死者のものよりもたくさんある。

預言者――**彼に平安あれ**――の時代に1本の木があった。アラブ人はその木に跪拝しており、木から聞こえる不思議な声に耳を傾けていた。木は「ウッザー（'Uzzā）」[60]と呼ばれていた。預言者――**彼に平安あれ**――はウッザーを破壊するよう、ハーリド・ブン・アル＝ワリードを派遣した。ハーリドは斧を振り上げ木を切り倒すと、預言者――**彼に平安あれ**――に［その旨を］報告した。

預言者は尋ねた。「何か見たか？」

［ハーリドは］言った。「何も見ませんでした。」

［預言者は］言った。「まだ［根こそぎ］掘り起こしてはいないのだ。」

ハーリドは引き返すと、木の根元を掘り起こした。［すると］根元から火炎が上がり、ハーリドに降りかかって彼の腿を焼いた。長い時間をかけて彼はようやく［ウッザーを］根こそぎ掘り起こした。すると木の根元から裸の女が現れた。髪を振り乱し、金切り声をあげていた。ハーリドは言った。「**おまえは邪なもの。おまえは邪なもの。おまえに称えなし。アッラーがおまえを蔑んでいたことをまことに私は知っている**」と。すなわち［ペルシア語では］、「おまえに呪いあれ。おお、ウッザー。私はおまえを神として崇拝しない。」

それからハーリドは預言者のもとに帰った。［預言者が］「何か見たか」と聞くと、［ハーリドは］

56）ともに、アンドロメダ座β星（ミラク）のこと。

57）それぞれ、ふたご座ε星（マブスタ）とζ星（メクブダ）を指す。

58）テキストの星の名称は崩れているが、おそらくはこいぬ座の1等星であるα星プロキオンを指すのだろう［*An Eleventh-Century Egyptian Guide to the Universe: The Book of Curiosities*, Ed. and Trans. by Y. Rapoport and E. Savage-Smith, Brill, Leiden, 2014, p. 643］。なお、この文章から、これらの星の説明はテキストに添えられた図版に示されているものと判断される。

59）ぎょしゃ座β星（メンカリナン）のことか。

60）イスラーム勃興以前のアラビア半島に存在した女性の神格で、「非常に強力なもの」を意味する。ギリシア神話の女神アフロディーテに由来するものと考えられている。初期イスラーム時代の文献によると、アラビア半島のナフラ渓谷に神殿があり、そこに生える3本のアカシアの木の1本に女神ウッザーが宿ると考えられていた［*EI*²: al-'Uzzā］。『クルアーン』53章19–20節では、イスラーム以前のアラビア半島で信仰されていた他の2つの女性の神格アッラート、マナートとともに言及される。

「これこれこのような女を見ました」と言った。預言者――**彼に平安あれ**――は言った。「**今日をもって、もはやウッザーはいない。**」

預言者の出現という［神の］恩寵によってウッザーの騒擾は絶たれた。いにしえより人々はウッザーに惑わされ、その木を崇めていたのであった。

＜逸話＞

イスカンダリーヤに1人の羊飼いがおり、羊の群れを所有していた。毎日群れから1頭の羊が姿を消すので、男は困り果てて、待ち伏せをすることにした。ある日、見目麗しく、(p. 507) 髪の長い裸の娘が海から現れるのを目にした。彼女は1頭の羊を奪い、海に沈んでいった。羊飼いは待ち伏せを続けた。すると翌日も彼女は現れ、羊を1頭奪った。羊飼いは彼女を捕らえて、ある建物に連れて行き、縄でしばった。娘は羊飼いに言った。「私を放してください。そうすれば、イスカンダリーヤの人々がジンたちの災いから守られるよう、私はまじないをかけます。」

［羊飼いは］「よし」と答えた。

彼女はイスカンダリーヤの壁の上に何体かの像を作った。その後、彼女の命に応じて、イスカンダリーヤのすべての壁に様々な像が作られた。というのも、種々の海の魔物たちがそれを恐れていたためである。それから［羊飼いは］彼女を解放してやり、彼女は海に潜っていった。

＜逸話＞

ジャールハンダル (Jālhandar)[61] の境域に湖があり、そこには水に暮らすジンたちがいる。夜、岸辺に現れては踊りを踊る。ある者は次のように伝える。「ある夜、私はジャールハンダルのとある山中で宿営し、女たちを目にしました。へそから上はみな人間のようで、下半分は動物のようでした。月明かりの差す夜に人々は見物に出かけ、離れて座り、それを眺めるのです。」

ある者がその話を聞き、ジャールハンダルに向かった。彼は若く美形であった。夜に湖のほとりに座っていると、娘が1人現れ、朝になるまで彼の前で踊った。朝が来ると、彼女は湖に潜っていった。またある夜には、娘は純金のかけらをこの若者の前に置いていった。ジャールハンダルの王に［このことが］伝えられた。王は若者からその純金を奪い取り、殺そうとしたので、若者は逃げ出した。かの娘は長い間湖の岸辺で嘆き悲しみ、その後姿を消してしまった。

この逸話は珍妙だが、その真正さについては保留する。語られてきたものを私は引用したにすぎない。

＜逸話＞

次のように言われている。琥珀の山 (kūh-i bījāda) の上には大きな池があり、その池から人間に似た生きものが外に出てくる。別のものは馬に似ている。ある王が実態を確かめようとその境域に向かった。1人の潜水夫を［池に］潜らせ、王は岸辺で待っていた。しばらくして (p. 508) 潜水夫は［水から］上がるや、大声をあげながら山の上に向かって走り出した。潜水夫のうしろからは、海の魔物の一群が現れ出た。彼らは山上で彼をつかまえると、吊るして食べてしまった。王は軍隊とともに引き返した。

これもまた珍奇な話である。

61）北インドのパンジャーブ地方の都市、ジャランダル (Jālandhar) のこと［*Ḥudūd al-ʻālam*, Minorsky comment, p. 247］。

［逸話］

次のように言われている。バーミヤーンの境域に荒廃した村がある。その場所で人が眠ると、何者かがやって来て、その人を蹴り、衣服をずたずたに引き裂いて荷を解き、駄獣を逃がしてしまう。

＜逸話＞

次のように言われている。パンジュヒール[62] の境域に「村々のカーリーゥ（KARY‘ al-qurā）」と呼ばれる村があり、［そこには］赤い宝石の鉱山がある。鉱山には、長い年月をかけて掘られたいくつもの洞穴があり、その中には妖魔たちがいる。ある者は次のように伝える。「私はその場所で背の低い 1 人の老人を見た。やがて老人は姿を消してしまった。『私はこういうものを見た』と人々に話したところ、『それは「鉱山の老人（pīr-i kānī）」と呼ばれるものだ。行く手を遮ったり、灯りに息を吹きかけて消してしまったり、遠くから石を投げたり、鉱夫たちの服を土の中に隠したりするのだ』と彼らは言った。」

＜逸話＞

次のように言われている。ある商人のグラーム（男奴隷）が毎日その場所に行き、多くの宝石を手にしていた。このことはパンジュヒールの王の知るところとなった。王はグラームを捕らえて泥酔させ、「この宝石をどこから持ってきたのだ」と彼に尋ねた。彼は「鉱山で小さな老人が私にくれたのです」と答えた。［王はグラームを］解放してやった。王は命じて、一団に彼の後をこっそりとつけさせた。グラームが鉱山の中に入っていくと、老人が現れ、宝石を探し出してはグラームに与えた。［一団の者たちは］「こいつは災厄をもたらす老人だ」と叫び、老人に向かって石を投げつけた。老人はつるはしでグラームの頭を打つと、姿を消した。彼らは死んだグラームを連れ帰った。

こういった逸話がいくつも語られている。それが正しかろうと偽りであろうと、私は［そのまま］引用したにすぎず、（p. 509）類推で述べているにすぎない。まじない師たち（mu‘azzimān）は、ジンが男あるいは女を好み、人間の体に入ることを否定はしない。だが、こちらが「幽質のものが稠密なものの中に入ることはない」と言おうものなら、「幽質の光が重厚な（ṯiqāl）ガラスの中に入るようなものだ」と彼らは言う。この言説は彼らの間ではよく知られたものである。ヒンドの人々もこれを否定しない。

＜ジンの棲み処について＞

さて、ディーヴや妖精が棲んでいることでよく知られている場所について述べよう。

シャームには多く［のジン］がいる、と言われている。シャームにいるディーヴたちの長の名は「ダルカーザーブ（Darkāḏāb）」であり、ヒンドゥスターンのディーヴたちの長の名は「タンカウィール（Tankawīr）」である、とも言われている[63]。

62）本訳注（5）、395 頁。アフガニスタン東部のヒンドゥークシュ山脈南麓を流れるパンジシール川流域にあった町。町は銀山に隣接しており、9 世紀から 10 世紀にかけてサッファール朝やサーマーン朝、地方領主など様々な政権がここから採れた銀鉱石をもとに貨幣を打刻していた［稲葉穣「8–10 世紀ヒンドゥークシュ山脈の南北」『西南アジア研究』79、2013 年、1–27 頁］。

63）各地に棲むディーヴの長については、ジャーヒズの『動物誌』に同様の記述がある［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 6, p. 232］。

至高なるアッラーがタスム族やジャディース族、アミーム族を滅ぼされたとき[64]、ジンが彼らの居住地を奪った。人間がアード［の地］や彼らの谷、サムードの谷に向かおうとすると、ジンたちはその者に土を投げつける。その者がさらに進んで［ジンと］対抗しようとすれば、ジンによって錯乱させられ、死んでしまう。

同様に、ハラマーンはミスルの境域にある2つの宮殿であるが、ジンがそこを占有しており、誰もその頂まで昇ることはできない[65]。猛者（šāṭirān）の1人が、ハラマーンの1つの中に入れるかどうか賭けをした。彼は大いに奮闘して何とか中に入った。3日後、人々が待っていると、その男が回廊や内室に通じる小窓から顔を出した。彼は頭を揺り動かしながら、次のように言った。「**アイサフ・アムラフラヒーン・ダーハシー・バルシャン**（AYṢḤ AMLHLHYN ḌAḪŠY BLŠN）」と。彼はこの言葉を残していなくなってしまった。これらの語は世界中の人々の間で「あの言葉は何語だろうか」と話題になった。人々は、「あれはディーヴの言葉であり、あの男の口を通じて発せられたものだ」と言い合った。その男の消息は杳として知れなかった。

ジンはこのハラマーンを［今も］占有している。タドゥムル（パルミラ）[66] と同じく、ジンたちがそれを建設したのだ、と言う者もいる。彼らが『クルアーン』に基づいて述べているのであれば、正しかろう。［神がスライマーンに服従させたシャイターンには］「**大工がおり、潜水夫がいた**」［Q38: 37］**という至高なるお方のお言葉にあるように**。建物（ハラマーン）は300アラシュもの高さにまで積み上げられ、1つが10万マンもの重量のある石が針の先さえ通らないようなやり方で［隙間なく］積み重ねられている。（p. 510）人間の力では、このような石を使って土台を築くことさえ不可能である。それぞれの石は縦横10アラシュの立方体に削られている。次に、第2の土台はどのようにして築かれたのか。また、上部の石はどのようにして積み上げられたのであろうか。加えて、誰がドームの天辺や、器のように継ぎ目のない丸い一枚岩を持ち上げ、その上にぴったりと据えつけたのであろうか。誰かが「ディーヴやイフリートたちがやったのだ」と言ったとしても、あながち間違いではないだろう。

この話が意味するところは、［そこが］今では妖魔たちの棲み処だということである。

しかしながら、「誰かがディーヴを殺した」とは私は未だかつて聞いたことがない。ディーヴを殺した者がいるとするならば、それはスライマーンであろう。なぜなら、彼はディーヴたちを岩の中に閉じ込め、鉛で固めて海に投げ捨てたからである。

ところで、次のようにも言われている。白いディーヴがカイカーウースを捕らえて彼の軍の者たちを盲目にしたため、ザールの子ロスタムが現れて白いディーヴを殺した、と[67]。［だが］これは偽りである。なぜならば、誰もディーヴを殺すことなどできないからである。

一方、ヒンドの人々は次のように言っている。大地から高く突き出た「アウラング（玉座）（Awrang）」という名の場所があり、［そこは］ディーヴの墓である、と。彼らはそれを「大地のドーム（qubba al-arḍ）」と呼ぶ。また、［次のようにも言っている。天の］北極の下には「ミールー」と呼

64）タスム族とジャディース族については本書第4部に既出［本訳注（5）、478頁］。アミーム族も両部族と同じくアラブの伝説的な部族であり、ワバールに居住していた。なお、アミーム族が神の怒りを買って滅ぼされた後、その生き残りが「ナスナース」と呼ばれた、という記録も残されている［al-Ṭabarī, *Tārīḫ*, vol. 1, p. 105］。

65）「ハラマーン」は「2つのピラミッド（三角錐）」の意。ハラマーンは、本書第4部に項が立てられている［本訳注（5）、476–477頁］。

66）タドゥムルの町については、本訳注（5）、397–398頁および本訳注（7）、507、519頁を参照のこと。

67）ロスタムが白いディーヴ（白鬼）を退治する話は、フェルドウスィーの『王の書』に見られる［フィルドゥスィー『王書』（黒柳訳）、114–118頁］。

ばれる山があり[68]、そこは天使たちの墓である、と。赤道とアウラングは相対しており、ともにミールーの山まで続いている。

［逸話］

ハイサム・ブン・アディー[69]は、「イブリースの友人」と言われていたアブドゥッラー・ブン・ヒラール（‘Abd Allāh b. Hilāl）[70]から話を聞いた。［アブドゥッラーは］次のように語った。

ワースィト[71]にいるディーヴは、名を「ズーバア（Zūba‘a）」という。ズーバアは私にこう教えてくれた。「ハッジャージュ・ブン・ユースフはひとりでいるときは礼拝もせず、臆病な男であった。［ハッジュージュは］私（ズーバア）を見るや恐れおののいた。彼は恐怖のあまり、服を着たまま失禁した。彼は命じて、服に『クルアーン』［の章句］を書かせた。彼は［それを］洗い、洗った水で土を捏ねた。そして宮殿にその土を塗り込んだ。ディーヴたちが怖かったからだ」と。

私が「ハーリド・アル＝カスリー（Ḫālid al-Qasrī）[72]と会ったことがあるか」と尋ねると、［ズーバアは］こう答えた。「あるとも。勇敢な男だったが、痛風を患っていた。鉄の柱を投げつけてきたが、私を仕留め損ねた。また、ユースフ・ブン・ウマル（Yūsuf b. ‘Umar）[73]とも会ったことがあるぞ。布団をかぶって、私を恐れてそのまま失禁しおった。イブン・フバイラ（Ibn Hubayra）[74]とも遭遇した。彼が剣を抜いたので、私は隠れたが。［イブン・フバイラは］『私がおまえを仕留めていれば、もう誰もおまえを恐れることなどなかったのに』と言っておった。」

（p. 511）知れ。ワバール[75]の地には多くのディーヴがいる。そこは「ジンの棲み処」として知られている。

［逸話］

アキール（‘Aqīl）[76]は次のように述べている。「あるとき、私はウカーズ（‘Ukāẓ）[77]の市場で背の低い男を見た。彼は羊と同じくらい小さなラクダに乗っていた。彼は大きな声でこう言った。『そなたらの中に我らのために99頭の雌ラクダを駆り立て、ワバールの地へともに向かう者はいない

68）須弥山、メール山のこと。「ミールー」または「ミールーン」として既出［本訳注（2）、411–412頁］。

69）本書第4部に既出。クーファ生まれの歴史家（821/2年か824年没）［本訳注（5）、414頁］。

70）ハッジュージュ・ブン・ユースフと同時代の魔術師。「クーファのヒムヤル人（al-Ḥimyarī al-Kūfī）」というニスバを持つ。母方からイブリースの血を引いていたとされ、「イブリースの友」として知られていた［*EI*²: ‘Abd Allāh b. Hilāl］。

71）クーファ＝バスラ間に位置するワースィトとその建設者であるハッジュージュ・ブン・ユースフの話については、第4部に既出［本訳注（5）、477–478頁］。

72）Ḫālid b. ‘Abd Allāh al-Qasrī（743年没）。ウマイヤ朝カリフ、ヒシャーム治世のイラク総督［*EI*²: Khālid b. ‘Abd Allāh al-Qasrī］。

73）テキストではユースフ・ブン・「アムル（‘Amr）」となっているが、前後で挙げられている人物の経歴に鑑み、ウマイヤ朝カリフ、ヒシャームとワリード2世下のイラク総督、ユースフ・ブン・ウマルを指していると判断する。史料では愚鈍かつ残酷な人物として描かれる一方、気前のよい性格でも知られていた。744年のワリード2世暗殺後、新たにカリフに就任したヤズィード3世の命で捕らえられ、同年（または翌年）獄中で殺害された［*EI*²: al-Thaḳafī, Yūsuf b. ‘Umar］。

74）ウマイヤ朝カリフ、ヤズィード2世下でイラク総督となった ‘Umar b. Hubayra のこと［*EI*²: Ibn Hubayra］。

75）本訳注（8）、315頁、注133を参照。なお、ワバールがジンの棲み処とみなされていたことについては『動物誌』にも記述がある［al-Jāḥiẓ, *al-Ḥayawān*, vol. 6, pp. 215–216］。

76）本書第7部に既出のアキール・ブン・ウッラファのことか［本訳注（8）、289頁］。

77）アラビア半島のナフラとターイフの間の砂漠にある地名。地理書では ‘Ukāẓ と表記されることが多い。ヤークートによると、ジャーヒリーヤ時代にはすでに市場として知られていた［Ibn Ḫurdāḏbih, *Kitāb al-masālik*, p. 133; Ibn Rusta, *Kitāb al-a‘lāq al-nafīsa*, p. 184; Yāqūt, *Mu‘jam al-buldān*, vol. 4, p. 142］。

か。我らはそのラクダたちを過酷な荷運びに使おうぞ』と。人々が彼の周りに押し寄せた。その男がラクダを足で打つと、ラクダは稲光のように空を駆け上がり、見えなくなってしまった。我々は［彼が］ジンの一種であったと知った」と。ワバールはハドラマウトとマフラの間にある。

知れ。こういった種族のものたちは数多くいる。それらはいずれも醜い姿をしている。たとえば、マーフール（Māhūr）の境域にある山には、驚くべき［姿の］幽鬼（ḫayāla）たちがいる。彼らは世界中に生息している。また、南の境界上の人が住める地の向こう側には、ディーヴばかりが棲んでいる。

ジンに関する話として、この程度のことが言われている。ディーヴの存在について『クルアーン』が証言していなかったならば、私はこれらについて述べることを良しとしなかったであろう。しかしながら、創造主が「**火の炎からジンを創られた**」［Q55: 15］とおっしゃっている以上、［ジンを］否定することは不信仰（kufr）である。同様に、［創造主は］「**泥から人間を創られた**」［Q55: 14］、すなわち［ペルシア語では］、「われは人間を泥から創造した」ともおっしゃっている。これについて否定することは不可能なのだから、どうしてジンのことを否定することができようか。